平成25年度文学研究科博士論文要旨

道元禅師の思想的研究

角　田　泰　隆

本論文は，論題が示すとおり道元禅師の思想的研究を行ったものである。

まず序論において，筆者の宗学研究論を述べ，その研究対象である道元禅師の仏教史における位置を論じた。ここにおいて論じた仏教史は，これまでの宗学で捉えられてきた伝統的な理解の範疇を出るものではなく，史実を客観視するものではない。道元禅師自身が仏教史をどのように捉え，みずからの立場をどのように定めていたのかを，道元禅師の著作を通して推測したものである。道元禅師の思想を研究する場合，史実としての仏教史よりも，道元禅師が捉えた仏教史の解明がより重要であると考えたからである。また序論では，本論において道元禅師の思想を論ずるに当たって中心的に取り上げた文献である『正法眼蔵』について，四種の古写本（七十五巻本・六十巻本・十二巻本・二十八巻本）を取り上げ，その成立的考察を行った。ここにおいて展開した私論は，先ず六十巻本の編集が行われ，後に十二巻本の編集が企てられて六十巻本が崩され，十二巻本と七十五巻が成立したとするものである。但し，筆者は道元禅師自身による編集は，六十巻本と七十五巻本において列次番号がほぼ共通する四十巻あるいは五十巻までで，両編集本の完成は，道元禅師示寂後において懐奘によってなされたと推論した。

本論ではまず「道元禅の核心」と題して序説を述べた。道元禅師が比叡山での修学時代に抱いたとされる大疑滞の解決が，道元禅師を論ずる上で極めて重要であると考えたからであり，この疑滞の解決から本論で述べる道元禅師のさまざまな教説や，清規類の撰述が生まれたと言っても過言ではないと捉えたからである。道元禅師は坐禅修行を第一とした修行の重要性を説き，日常生活のあらゆる行持における威儀・作法を重視し，食事作法から洗面・洗浄の儀則に至るまで事細かに示しているが，これらの実践の強調は，比叡山における「本来本法性，天然自然身。顕密両宗，不出此理。大有疑滞。如本自法身法性者，諸仏為甚麼，更発心修行」という大疑滞の超克の上にあるとした。

本論第一章「修証観」では，まず道元禅師の修証観の特徴とされる「修証一等」「本証妙修」等について論じたが，「修証一等」が道元禅師の修証観を端的に表す語として認められることを述べた。「本証妙修」については，「本証」という語も「妙修」という語も『弁道話』に見られ，「現成公案」巻の風性常住の話の解説などからも，「本証妙修」の語も，充分な根拠をもって道元禅師の修証観を表す言葉として認められ得る。しかし，もし発心（出家）以前をも含めて「本証」と言うならば，それは他の道元禅師の修証観に関する説示と照らし合わせて矛盾する。発心（出家）以前，つまり仏道修行を伴わない状態（立場）をも含めてしまい易い「本証」という語は，まさに誤解を招きやすい語であり，道元禅師の修証観の特質を代表させる語としては不適切であると結論づけるに至った。また伝記資料に見られるいわゆる「身心脱落の話」については，これを虚構とする説もあるが，筆者は「身心脱落」という何らかの機縁があったという立場に立って，その時期と意義について考察した。また，修証観と密接に関わる「付法説」についても論じた。如浄・瑩山両禅師は「多子塔前付法説」に立ち，道元禅師は「霊山付法説」に立つことが知られるものの，思想的に見れば，道元禅師も「多子塔前付法説」に立つものであり，そこには思想的相違はなく，三禅師は一貫した立場に立っていると結論した。また道元禅師においては，思想的には「多子塔前付法説」に立ちながらも機縁としては「霊山付法説」に立ったところに実は深い意義付けが出来ることも論じ，その根底には「修証一等」の修証観があることを論じた。また，道元禅師の修証観において注意すべき「本証」という語の定義に関連して「覚（悟）と証」の相違についての見解を述べ，道元禅師の修証観をより明確に示すことができたと思う。

第二章「修道論」では，道元禅師の仏道修行論について，道元禅師が説く修行の諸相について論じた。まず，道元禅師の仏道修行の特色としてよく知られている「只管打坐」（祇管打坐）について論じ，只管の意味を考察し，坐禅が第一の行であり，その坐禅は無所得無所求無所悟

でなければならないとする説を明らかにした。特に「只管」（祇管）を，道元禅師が非常に尊敬している中国の禅者の一人である大梅法常の「祇管即心即仏」と関連づけて論じたことは，新たな視点であろうと思う。また，その仏道が今生に限らず永遠の道であるとする説示を取りあげて，道元禅師が説く無窮なる積功累徳の遙かなる仏道について述べ，道元禅師は釈尊と同様な「無上菩提」の成就は遙か未来のこととして願われていたのではないかということを論じた。

第三章「世界観」では，まず，道元禅師の世界観について，道元禅師がこの実態としての世界，物理的世界をどのような世界と捉えていたのかについて，当時の仏教者がそう信じていたインドの須弥山世界観，三千大千世界，即ち我々人間世界は須弥山を北に仰ぐ南贍部州であり，そこにインド・中国・朝鮮・日本等が存在するという世界観を説いていることを論じた。しかし，道元禅師の捉えた世界はこれにとどまるものではなく，広狭・大小には関わらない，「今」「ここ」「このこと」を生きる実際的世界観であることを，「現成公案」「心」「夢中説夢」など，道元禅師の世界観に関わると思われる語を取り上げて論じた。

第四章「時間論」では，道元禅師の時間論を禅師の言葉によって「有時」「経歴」「刹那生滅」「吾有時」の四つに分類して考察した。「時間」と「存在」，そして「吾」や「修行」，それらが決して切り離せないものとして示されていることが明らかとなった。

第五章「因果論」では，道元禅師の因果論は，因果歴然の道理の上に立った因果超越の因果論であることを論じた。晩年になって因果歴然として深められた，あるいは因果歴然に改められたという説もあるが，そのような変化はないとした。但し，「百丈野狐の話」における「不落因果」の解釈は，「大修行」巻と「深信因果」巻では，明らかに相違しており，これについては「大修行」巻を年代的に先の選述とすれば，「深信因果」巻において，「百丈野狐の話」における「不落因果」の解釈は，「まさしく撥無因果なり」と改められたと思われることを論じた。ただ，それはあくまでも「百丈野狐の話」における「不落因果」の解釈が改められたのであって，因果論そのものの変化ではなく，公案解釈の変化であり，道元禅師の思想の変化とは言えないものであるとした。

第六章では「仏性論」について論じた。まず道元禅師が仏性論を受容していたことを述べたが，『涅槃経』に見られる「悉有仏性」の語を「悉有は仏性なり」と読み，「一切衆生」を「悉有」（悉く有るもの）と解釈し，一切衆生であるところの悉有を「仏性」とする道元禅師の解釈について論じた。また，道元禅師が，「仏性」に対する誤った理解として批判している仏性理解を挙げて整理しながら，道元禅師の仏性論を明確にすべく試みた。さらに龍樹の身現円月相の話に見られる「身現」という語に注目し，仏性は修行のところに現れるとする道元禅師の仏性論を確認し，伊藤秀憲氏の説を受けて，坐禅が仏性にほかならず，坐禅の姿こそ仏性の現れであると論じた。

第七章「身心一如説と輪廻説」では，道元禅師の身心一如説が，無我説の主張を主眼とするものではないことを述べ，身心一如説は何のために説かれたのかについては，修行無用論に対する批判の中で示されたものであり，身心一如説の主張，すなわち心常相滅論批判は，要するに修行無用論批判であると考えられることを述べた。つまり，身とは別に，身とは隔別の，すなわち身による修行とは関わらない（身の修行を必要としない）本来清浄なる心，本来完成された円満な本性の存在を否定されたのであり，それは「輪廻の主体」の否定ではなく，「輪廻の主体」がもとより完全無欠な存在ではないということの主張であったと考えられることを論じ，道元禅師は，修行の功徳を積み上げて行くものとして，「輪廻の主体」を認めておられたと結論せざるを得ないとした。

第八章では，道元禅師の言語表現について論じた。まず，道元禅師がなぜ多くの言葉（著作）を残されたのかについて，その教化活動において直接的に関わることのできない「真実の参学」や，後代の参学者までも視野に入れて，「正伝の仏法」を書き記して残すことを意図されたのではないかと推論した。そしてその「正伝の仏法」を言葉によって表現できるとする道元禅師の「道得」という立場を明らかにし，そのための特異な言語表現について，特に物事の同一性を端的に表現しようとした言語表現（「絶対同一」と表現）について考察し，また，道元禅師が経典・語録の言葉を取りあげて，しばしば特異な解釈を与えて用いている一例として「將錯就錯」という語を取り上げ，この語の重要性を論じた。

第九章では道元禅師の「教化論」を述べた。道元禅師は『弁道話』に示されるように「弘法救生」の誓願をもって帰朝したことが知られる。この誓願こそ道元禅師の布教教化の根本であるが，道元禅師は伝道布教の旅に出ることよりも，正伝の仏法を言葉に記して残す道を選んだものと考えられ，この願行こそが，道元禅師の人天大衆に対する布教教化であったとも言えることを論じた。とはいえ，道元禅師は寺に籠り著作の撰述に専念していたのかというと，そうではなく，在家信者や禅人との関わりがあったことも述べた。また，道元禅師の教化論を

論ずるにあたって重要な「四摂法」を取り上げ，利他行の基本であると考えられる「自未得度先度他」について論じた。これを自らが実践することが衆生を救済することであることは当然のことながら，この心を一切衆生に発こさせることが衆生に利益を与えることであり，それこそが真に衆生を救済することであるという道元禅師の説示は，まさに特筆すべき道元禅の特徴であるとした。

さて，本論では「修証観」「修道論」「世界観」「時間論」「因果論」「仏性論」「身心一如説と輪廻説」「言語表現」「教化論」と九章に分けて，道元禅師の思想を論じたが，実はこれらはそれぞれが密接に関連しており，区別して論ずることができないものである。それぞれに他のすべてが含まれていると言ってもよい。そして，その根底にあるものは，やはり行（修行）であることが知られたのである。

ところで本論文では，附論として道元禅師研究における諸問題についての研究動向を掲載した。特に近代の宗学論争の記録を将来に残しておきたいと考えたからである。この論争を風化させてしまってはならないとの思いから，出来るだけ客観的に詳細に論争の経緯を総括したつもりである。今後の道元禅師研究にいささかなりとも役立てば幸いである。附論ではさらに「道元禅師と現代」という章を設け，道元禅師と葬祭や，道元禅師と社会との関係について，現代的・社会的・教団的視点からも道元禅師の思想について触れてみた。

クリストファー・クラヴィウス研究
――イエズス会の『学事規定』と教科書の史的分析――

文学研究科歴史学専攻　曽　我　昇　平

クリストファー・クラヴィウス（1538–1612年）は，バイエルンのバンベルクに生まれ，1555年にイエズス会に入会し，翌年から1560年までポルトガルのコインブラ大学で修学した。そして，イエズス会の中心的教育機関であるローマ学院で神学を学んだ後，1564年に単式終生誓願司祭に叙品され，1567年から1612年まで同ローマ学院で「数学的諸学」の教授を務めたイエズス会士である。本論文は，中世の「数学者」「天文学者」「数学教育者」とされるクラヴィウスを研究対象とし，彼が深く関与したイエズス会の『学事規定』と，それに準拠した教科書を史料として，イエズス会教育において彼が果たした役割，さらに近代科学の成立に繋がる彼の功績について追究した研究である。

本論文は，序説と第Ⅰ部「クラヴィウスとイエズス会教育」, 第Ⅱ部「クラヴィウスの数学的知見の伝播と影響」から成る。

序説では，まずイエズス会教育の研究史について概観した。そして，キリスト教の宗教改革期，カトリック側の知的前衛組織であったイエズス会は，従来，ガリレオ裁判の原告側として，「科学に敵対する組織」と見なされてきたが, 近年の研究で「科学の保護者にして教育者」と評価されるほど，近代科学の成立に大きな役割を果たした組織であると考えられるようになってきたことを指摘した。次いでクラヴィウスの研究史を概観し，次の3点，①近年のクラヴィウス研究により，彼は時代を代表する数学者としてだけではなく，教育者としても着目されるようになってきたこと，②彼が近代教育の原型とも言われるイエズス会の教育課程の編成，教科書執筆や教員育成等に貢献したことが評価されるようになったこと，③近代科学・数学を生み出したガリレオやデカルトへの影響についても言及されるようになってきたことを指摘した。

第Ⅰ部第1章では，こうした近年のクラヴィウス研究の知見に基づき，クラヴィウスがイエズス会の教育に及ぼした影響を探った。その際，既存の科学史・数学史の研究では十分でなかったイエズス会側の視点から，次の3点の考察を試みた。

第1点は, クラヴィウスがどのような教育を受けたか，また，「数学的諸学」についてどのように理解し，イエズス会の「数学的諸学」の教育をどのように導こうとしたかについて考察した。クラヴィウスはポルトガルのコインブラ大学で，他の大学では学ぶことのできなかった領域の数学を学ぶ機会を得た。それは，アラビア数学の影響を受けた実用算術と，新プラトン主義の影響を受けた幾何学とであり，以後の彼の数学観を形成し，イエズス会の数学的諸学科教育に関して，その方向性を定礎することになった。

第2点は，宗教改革期，カトリック側の知的前衛であったイエズス会が，なぜ教育の分野に進出したのか，しかも，他の教育機関とは違い「数学的諸学」に力点を置いたのかについて考察した。当時は，近代的な意味での数学も物理学も，さらには科学も概念形成されていなかった。「自由七科」の後半の「四科」，幾何学・算術・天文学・音楽を総括する概念として“Mathematica”（数学的諸学）が使われていた。イエズス会学校の隆盛について，イエズス会研究者は一般に，当時流行していた「人文主義」と，イエズス会の宗教的な「霊的刷新」が大きな理由であると考えているが，この理由のみでは「人文主義」を掲げるイエズス会の学校でありながら「自然科学」の礎を成したこと，また，「霊的刷新」を目的とする学校でありながら近代普通教育の原型を成したことは説明がつかない。この時代は「人文主義」や「霊的刷新」より「数学的諸学」の教育に大きな需要があり，イエズス会の学校は時代に合った経営の仕組みや方法を示したのである。時代がイエズス会の学校を選んだのであり, 数学的諸学科教育の充実により, 後世, イエズス会は「科学の保護者にして教育者」と評価されたのである。

第3点は, イエズス会が「科学の保護者にして教育者」となるためには，クラヴィウスの功績がいかに大きかったかを明らかにした。彼は，イエズス会学校において，当時の社会が必要とした「数学的諸学」の教育課程を創り上げた中心人物であり, 求められていた「数学的諸学」の必要性を説明するために, 実用面の有用性のみならず, 教養的知識としての有用性をも提示している。クラヴィウスが示した，「数学的諸学」の実用的な有用性（益をもたらす実用性）と，教養的知識としての有用性（学問

的な客観的確実性）は，来る17世紀科学革命の中核概念につながるものであった。「有用性」と「確実性」を生み出す手段として「数学」が位置づけられるのが科学革命であった。ここで初めて“Mathematica”が，天文学や地理学，音楽をも含んだ「数学的諸学」から，それらの科目の「有用性」と「確実性」を保証する基礎学問としての「数学」という意味へと変化するのである。

第Ⅰ部第2章では，1599年のイエズス会『学事規定』をもとに，イエズス会教育の隆盛の理由について，次の3点からその考察を試みた。

第1点は，イエズス会の『会憲』と『学事規定』に記載された「数学的諸学」の扱い方について考察した。1558年に定められたイエズス会の『会憲』には，イエズス会学校では，神学の勉学のための思考力を整えるためと，神の完全な知識を得て，その知識を活用することを助けるために，「自由学芸と自然哲学」を学ぶことが表示されている。『会憲』における「数学的諸学」のとらえ方は，神学の勉学のためには，自由学芸と自然哲学の学習が必要であり，学習の中心はアリストテレス哲学であるが，「数学的諸学」の学習も考慮すべきであるとするものであった。つまり，会としては「数学的諸学」をそれ程重視していたのではなかった。しかし，神学生と一般学生の両者を教育の対象としていたイエズス会学校では，双方とも満足させることのできる教育課程を編成しなければならなかった。この編成にクラヴィウスが大きく関わったのである。

第2点は，クラヴィウスの考えと主張がどのように『学事規定』に反映されたのかを考察した。クラヴィウスは，「幾何学と算術」には多方面に有用性があることを示した。第一は，自然哲学・神学・天文学・地理学の基礎学問としての有用性である。第二は，実用面の有用性であり，官僚・将校には分析と証明に，教会には暦と時間の計算に，また専門家には航海術と測量術に，それぞれ「幾何学と算術」が応用できることを具体的に示した。クラヴィウスの提案は『学事規定』に盛り込まれ，イエズス会の教育課程の中で「数学的諸学」が大きな位置を占めることとなった。教育において人文学教科の学習が重視され，「数学的諸学」が下位に見られていた当時の風潮の中では，「数学的諸学」の重視は極めて稀なことであった。

第3点は，クラヴィウスが著した『学事規定』準拠の「数学的諸学」の教科書を分析した。彼の著した教科書には，近代科学の要素となっていく概念が溢れていた。その一つは無限の扱いである。クラヴィウスは，20の平方根を4.472という量で把握している。二つ目は「幾何学と算術」の統合である。彼は，理論的な計算値と実際的な測定値との整合性を問うという，新しい学問の進むべき方向を示している。こうした彼の考え方は，後の科学的追究と同じ意味を示すものであり，統一された「幾何学と算術」は「数学」を意味している。それ故，彼の提案した学問的な知識の追究方法は，西洋各地の数学者，遠くは中国の学者にも正確に伝わり（第Ⅱ部で詳述），彼の教科書で学んだ多くの学生たちの中から，後年，近代物理学や数学を創り上げた学者たちが育つのである。

第Ⅰ部第3章では，イエズス会教育の限界について，クラヴィウスの「知的遺言」を中心に，次の3点からその考察を試みた。

第1点は，ガリレオ（1564–1642年）とイエズス会教育，特にクラヴィウスとの関わりを追究した。イエズス会教育の限界が著しく現れたのがガリレオ裁判であったが，従来の科学史・数学史ではガリレオ側からの考察が中心であったため，イエズス会教育を受けていないガリレオには，イエズス会教育との関わりという視点からの研究はほとんどなかった。また，二人の出会いは，ガリレオがピサ大学に職を得るための推薦状をクラヴィウスに求めたとき以来であるが，このときガリレオがクラヴィウスに提示した論文の内容やそれに対する評価についても，これまで後年の天才ガリレオの視点から言及されることはあっても，青年ガリレオの視点からは十分な説明がなされてこなかった。ガリレオは，当該論文でアルキメデスの方法では精度に欠けることを指摘すると共に，溢れ出る水の量を正確に測定することのできる実験装置と実験方法を提示し，「数学的方法と実験的方法とを結合し，数学的関係を法則化する」という近代科学に繋がる手法を提示している。ここにガリレオの独創性がある。しかしこの手法は，当時の主流であった「スコラ哲学と古代中世自然哲学の三段論法的論証」を用いた追究とは異なり，「工芸」的あるいは「実用」的な追究として，学問の場では下位に見られていた。それ故，ガリレオが単に実用的な装置を製作したという低い評価に留まるのでなく，彼の追究方法にまで注目し，彼の論文の中に「近代科学に繋がる手法」をもたらす学問性を見極めることは容易なことではなかった。青年ガリレオ自身も，自分の論文の中にある先進的な学問性をまだ十分理解するに至っていなかった。しかし，クラヴィウスはこの点を明確に理解していたのである。

第2点は，パドヴァ大学教授ガリレオとクラヴィウスがそれぞれ異なった関心を示していた「実用」について史料分析を行った。ガリレオは「実用」に供する機器の製作のために，学問としてのエウクレイデス幾何学，特

に比例論を「実用」に合わせて使用していた。一方，クラヴィウスは，実践的学問における「実用」を中心に教科書を著し，その思弁的学問に従属する立体幾何，測量術，建築術，航海術，農業などの「実用」を考えていた。クラヴィウスの示した「実用」こそが，後年，天才ガリレオが示した「近代科学に繋がる手法」に直結するものであった。超新星の出現した1604年に，クラヴィウスがガリレオに贈った書『実用幾何学』は幾何学を実用的に適用した書ではなく，小数や近似値が使われた測量に関する学術書であり，測定値の数的処理を必要とするガリレオにとって有益な書であった。

第3点は，クラヴィウスと天文学者ガリレオとの交流に関わる史料を読み解き，イエズス会教育の限界を明らかにした。ガリレオは，自ら製作した天体望遠鏡で，月や太陽，そして木星を観測することで，アリストテレス＝プトレマイオス的宇宙論では説明できない明白な事例を世に提供した。それによって天体観測の第一人者になったガリレオは，クラヴィウスから「知的遺言」を託された。クラヴィウスが求めたのは，実用的学問である「天体観測」で使えない理論なら，「天体観測」の支配学問である「天文学」の修正を行うべきであるというものであった。元来，クラヴィウスの「知的遺言」はイエズス会士に向けられたものであった。しかし，アリストテレス主義を会の中核思想とするイエズス会士にとって，観測・実験で得られた結果がアリストテレスの世界観に反する場合，それは受け入れがたいものであった。彼らは仮説・検証の方法論を欠き，観察・実験に基づく思考を回避する姿勢に固執した。それ故，隆盛を誇ったイエズス会学校の教育もその限界を露呈し，「科学の保護者にして教育者」としての立場を失って行かざるを得なかったのである。「天文学」の修正は，結局，ガリレオに託される課題となった。しかし，ガリレオにはまだ「数学的関係の法則化」を導く数学的知識が不足していた。「知的遺言」の履行には，クラヴィウスの「数学」を学んだデカルト（1596–1650年）の世代まで待たねばならない。

第Ⅰ部第4章では，イエズス会教育が三十年戦争期（1618–1648年）にどのように破綻し，それが担っていた「科学の保護者にして教育者」という役割がどのように継承され17世紀科学革命に繋がったかについて，デカルトを通して次の3点からその考察を進めた。

第1点は，デカルトの思想が形成された三十年戦争期の時代背景について概観した。デカルトは国の中枢を担う「法服の貴族」の家に生まれ，将来を期待されてイエズス会の学院であるラ・フレーシュ＝アンリ4世王立学院に進学した。イエズス会自体は三十年戦争によって財政的危機に追い込まれていくが，デカルトはここでクラヴィウスの「数学」に出会い興味を喚起された。また三十年戦争の開戦時には，当時「軍事アカデミー」の様相を呈していたオランダ軍に加わり，冬営地ブレダで後のデカルト哲学を生み出す基盤となった「決定的な二年間」を過ごしている。

第2点は，デカルトの思想形成に影響を与えたイエズス会教育について，『方法序説』と『学事規定』の記述をもとに考察した。デカルトは『方法序説』の中で，「数学」の持つ「学問性」の高さと論理的な「確実性」とともに，「数学」の実用面の「有用性」について学んだことを記述している。これこそが，デカルトがラ・フレーシュ学院で特別に学び取った，クラヴィウスの数学観・学問観であった。

第3点は，クラヴィウスとデカルトの学問観について，「尊厳」「有用性」「確実性」の三つの視点から分析し，クラヴィウスからデカルトへの学問的影響について考察した。その際，クラヴィウスとデカルトの比較に加え，ガリレオの学問観との比較も行った。ガリレオとデカルトは，それぞれ「比例コンパス」の研究と製作を行っており，両者の追究からは異なる学問観が見て取れる。クラヴィウスとデカルトはほぼ同様な学問規準を枢要と捉えていた。そして，二人はガリレオと異なり，実用に供することのできる新しい数学を追究していたのである。デカルトは，この追究により確実に「知的遺言」を履行している。「数学的自然学を形而上学的に基礎づける」というデカルトの考えは，クラヴィウスの「知的遺言」を哲学的に実践しうるものであった。イエズス会がクラヴィウスの学問観に対処できなかったのに対して，デカルトはクラヴィウスから受け継いだ学問観を新たな哲学にまで展開することができたのである。

第Ⅰ部の「結」では，クラヴィウスがイエズス会の教育，さらに近代科学の成立に果たした役割をまとめた。

第1点は，「数学」の「実用」性と，新プラトン主義に基づく「学知」とを重視したクラヴィウスの数学観が，イエズス会の『学事規定』に反映され，「数学的諸学」を重視したイエズス会学校における教育の方向性が定まったことであった。この方向性は時代の求めるところと合致し，イエズス会学校は急速に発展したのである。

第2点は，クラヴィウスが『学事規定』に準拠した「数学的諸学」の教科書を著し，教授法も提示することで，基礎学科としての「数学（幾何学と算術）」の「有用性」を示したことである。彼は，「数学」が思弁的学問の基礎理論を提供するだけでなく，実践的学問にも具体的な数値を提供することを示した。これによって，「数学」

を学ぶことの意味が明確になり，「数学」の担い手に対する需要が増大した。「数学」の担い手を供給できるイエズス会学校は, さらにその設置数を拡大したのである。

第 3 点は，クラヴィウスがアリストテレス主義を中核思想とするイエズス会学校の限界を予見し，それを打破する道を彼の「知的遺言」の中で明確に示したことである。この「知的遺言」はイエズス会士とガリレオに託されたが，それを履行することはできなかった。自由な学問追究に道を閉ざしたイエズス会は「科学の保護者にして教育者」の地位を失うのであった。

第 4 点は, クラヴィウスが目指した学問追究の姿勢は, 彼の教科書で学んだ多くの学徒によって確実に受け継がれたことである。特に，イエズス会の学院で教育を受けたデカルトは，受け継いだクラヴィウスの学問観を新たな哲学にまで展開することができた。イエズス会は，デカルトの新たな哲学に正面から対するのではなく，会士が論ずるのを禁じて守勢に転じた。イエズス会は「科学の保護者にして教育者」たることを止めたが，その地位は各国の「科学アカデミー」が引き継ぐことになる。

第Ⅱ部では，クラヴィウスの数学的知見が西洋キリスト教世界の圏外，特に中国でどのように理解され受容されたかについて追究した。クラヴィウスの教科書には，教科の概説書の枠を超えて，先進の研究成果が盛り込まれていた。特に, 彼が「算術」の教科書として著した『実用算術概論』には，近代科学に繋がる彼の数学観がよく表れている。この『実用算術概論』は同時期の中国に伝わり，利瑪竇（授），李之藻（演），徐光啓（選）『同文算指』として翻訳出版された。それはまったく別途の歩みによって形成された西洋と中国の「算術」の出会いであった。第Ⅱ部はこの『実用算術概論』と漢訳本の『同文算指』とを比較検討することにより，クラヴィウスの数学的知見の伝播や影響のみならず，彼の思想やその意義をより明確にすることを目的とし,「分数概念」と「三数法」,「複式仮定法」について比較分析した。

第Ⅱ部第 5 章（章番号は通し番号を使用）では，クラヴィウスが『実用算術概論』の中に記した，近代数学に繋がる概念について,『同文算指』との比較を通して, 次の 3 点の分析を行った。

第 1 点は，クラヴィウスが『実用算術概論』に込めたねらいが『同文算指』の漢訳者に的確に伝わったか否かを分析した。その結果，学問の「尊厳」と「有用性」について，漢訳者は民族や文化の違いを越えて，クラヴィウスの考えを深く理解していることが明らかになった。

第 2 点は,『実用算術概論』と『同文算指』の計算領域の全問題について比較分析した。この分析からは，分数計算の方法のみならず理論の裏付けまで確実に漢訳されていることが明らかになった。

第 3 点は,『実用算術概論』が中国算術に与えた影響について分析した。その結果, 漢訳者は,『実用算術概論』に記された計算の説明が簡潔で体系的であることを読み取り，中国算術に工夫して採り入れようとしたことが明らかになった。

第Ⅱ部第 6 章では，西洋の中世算術の中心的な技法であった「三数法」の扱いについて,『実用算術概論』と『同文算指』との比較から次の 3 点の考察を行った。

第 1 点は，「三数法」の扱いについて西洋算術と中国算術との違いを考察した。西洋算術の「三数法」はインド・アラビアから伝播した商用算術の中心技法であると同時に，神学での証明の基礎理論にもその技法が使われていた。一方中国での名称は「三率法」であり，計算方法は同じでも，数量ではなく「値」を表す「率」を用いるように，西洋と中国では概念の違いがあることが明らかになった。

第 2 点は，「三数法」を複数回使用する「共同算法」の単元で,『実用算術概論』と『同文算指』との全問題について比較分析した。この分析からは,『同文算指』では単に逐語訳されているのではなく，類似する場面を一つの問題群にまとめ，さらに中国算術の問題で補われていたことが明らかになった。

第 3 点は,『実用算術概論』を教授した利瑪竇と漢訳者との意識の差を考察した。両者ともそれぞれ自国の算術がより高い水準にあると認識していた。しかし漢訳者は，西洋算術の内容が古代中国算術を超えるものではないと見なしつつも，散逸し学問水準の低下した中国算術の再構成のために，クラヴィウスの考えが参考になることを見抜いていた。

第Ⅱ部第 7 章では，中世算術のもう一つの中心的技法である「複式仮定法」について，数学史の観点や『実用算術概論』と『同文算指』との比較から次の 3 点の考察を行った。

第 1 点は，学問としての「複式仮定法」がどのように発展したかを数学史の観点から考察した。「複式仮定法」の考え方は古代中国の「盈不足術」が最初である。それは，インド・アラビアの「アル = カタアインの方法」を経て中世西洋の「複式仮定法」へ, そして漢訳されて「疊借互徵法」となり，世界的に循環したのである。

第 2 点は，「複式仮定法」の単元で『実用算術概論』と『同文算指』との全問題について比較分析した。『同文算指』のこの単元は逐次訳されているのではなく，大

きく二つの問題群にまとめられ，さらに中国算術の問題で補われている。問題群に分けた根拠は代数的処理に関する中国と西洋の概念の差にある。この点は先の「三数法」の単元とは大きく異なることが明らかになった。

第 3 点は，『同文算指』の記述から，クラヴィウスの示した「数学観」・「学問観」が中国算術に与えた影響について考察した。漢訳者は中国算術の置かれている状況を，クラヴィウスが示した西洋算術の進むべき方向性と重ね合わせることによって深く理解し，彼の考えを中国算術の再興に積極的に活用しようとしていることが明らかになった。

第Ⅱ部の「結」では，クラヴィウスの数学的知見がヨーロッパ・キリスト教世界の圏外，ことに中国でどのように理解され受容されたかについて，彼の著書『実用算術概論』と同時代に利瑪竇より伝えられ徐光啓等によって漢訳された『同文算指』の比較分析を通して考察した。まず全体としてクラヴィウスの数学的知見が近代数学の扉を開く，多くの鍵を有していたこと，そして彼の書は，計算術だけでなく，進んだ学問観を伝えていたことを指摘した。クラヴィウスの学問観は，言語を超え，宗教を超え，思想を超えて正しく伝わっている。

具体的には，第 1 点として，クラヴィウスの主要な数学的業績とされている分数概念についてまとめた。クラヴィウスが示した分数計算を，漢訳者は単なる計算法として捉えただけではなく，理論的裏付けまで深く理解していた。それ故，漢訳者は，クラヴィウスの書から学ぶ分数について「特に奥深く流暢である」と記している。

第 2 点として，クラヴィウスが『実用算術概論』で扱った中世算術の中心的技法である「三数法」と「複式仮定法」とについてまとめた。彼の書にある「三数法」は古代中国算術を超えるものではないが，漢訳者にとって散逸し水準が低下した中国算術の再構築に役立つ技法と認識されていた。また，「複式仮定法」の考え方は古代中国に始まりインド・アラビアを経て西洋へ，そして再び中国に帰還した，「世界的循環」をなした算法であったことを示し，この算法も中国算術の再構築に役立った概念であった。

本論の「結語」としてクラヴィウスが成しえた功績について以下の 3 点を示した。

第 1 点は，クラヴィウスはイエズス会教育の方向性を決定づけ，イエズス会が後に「科学の保護者にして教育者」と見なされるほど，その教育を発展させた中心的存在であったことである。彼の意見が反映されたイエズス会の『学事規定』には，当時としては稀な「数学的諸学」の教育課程が盛り込まれた。それによってイエズス会学校が会士の育成機関の枠を超えて，一般教育の要求，ひいては国家の中核を担う人材の育成にも応えうることが可能となったのである。

第 2 点は，クラヴィウスの先進的学問観は，イエズス会教育の停滞にもかかわらず，彼の教科書から学んだ多くの学徒によって継承され，デカルトの世代を経て近代科学の成立に寄与することになったことである。イエズス会は三十年戦争による財政危機と，デカルト哲学の影響から生じた会士に対する学問追究の制限により，「科学の保護者にして教育者」の地位を失っていくが，クラヴィウスの書は禁書目録の対象とはならず，彼の書に込められた先進的な学問観と数学観は，次世代に伝えられていくのである。

第 3 点は，クラヴィウスの学問観は，同時代の中国にも宗教や思想を超えて伝播し，広く理解され受容されていったことである。クラヴィウスの書は，彼から直接学んだイエズス会士である利瑪竇によって中国に伝えられて漢訳され，後に『四庫全書』に納められるほど重要な書と見なされた。漢訳書は中国古来の算術の価値を再認識させるとともに，旧来の中国算術の不足を補って再構成させる契機を提供した。

中世常滑窯の研究

文学研究科歴史学専攻　中　野　晴　久

本論文は1980年代から今日に至るまで，筆者が継続して研究対象としてきた中世常滑窯に関し，考古学的研究を基にして主要なテーマごとにその成果をまとめたものである。

第１章「編年研究と生産地の変遷」では，1950年代以来先学によって取り組まれてきた研究史を総括し，最新の研究成果を取り入れながら12世紀から16世紀にかけて生産された中世常滑窯製品を１～12型式に編年し，さらに１型式と６型式は，それぞれ１a・１bと６a・６bに細分した。また，１～４型式を第１段階，５～７型式を第２段階，８～12型式を第３段階として画期を設定した。この編年の骨格は1994年に筆者が提示し，その後広く学会でも用いられてきたものであるが，本論文において10型式，11型式の年代根拠に新たな知見を盛り込んだ。そして，この編年をもとに知多半島で操業した中世窯の変遷を最新の分布調査のデータを基にたどった。

知多半島の中世窯は，基部において中世猿投窯の南部と境界を接しており，初期の１型式に属する窯跡分布からは空白地域が認められるものの，２・３型式になると両者の境界を設定することが困難になる。それは，単に中世窯が近接して分布するだけではなく，生産の様相も近似しているという点においても，その線引きを一層困難にしている。現状では，この12世紀後半の半島基部における中世猿投窯との線引きは留保せざるを得なかった。今後の大きな課題の一つである。そして，第３段階になると急に窯の数が減少し，その分布域も近世常滑窯のエリアと重なるような変化を示すことを明らかにした。

第２章「技術・遺構論」では中世常滑窯に関する各種技術と遺構の研究成果をまとめた。成形から装飾にいたる中世陶器の技術に関して，従来のロクロ成形技術の発達を前提とした議論に対し，筆者らは1980年代に疑義を呈したが，近年の実験考古学的研究成果は，その見解を支持しており，中世期の成形技術は古墳時代以来の須恵器の技術と大きく変化してはいないことを確認した。一方，焼成に関する技術に関しては従来の還元焔焼成・酸化焔焼成といった２分法を廃し，これも実験考古学の成果を取り入れて，より実態に近い復元を試みた。とりわけ中世常滑窯で顕著に認められ，瓷器系中世陶器の中でも常滑系とされる甕を生産する窯業地において褐色に器面を発色させる焼成法に関しては，従来ほとんど議論されてこなかったが，本論文においては，その冷却段階における「焚き冷まし」技法の可能性を示唆しつつ，今後の研究課題を提示した。

焼成技法と関連し窯体構造については，製品の主体が山茶碗系の小型品に主体がある窯と，甕などの大型品に主体がある窯とに大別し，型式ごとの変遷を検討した。山茶碗主体の窯は甕主体の窯に比べ常に窯体が小規模で，焼成室の長さが短い傾向にある。両者は互いに連動するように変遷するが，１b型式に突如として現れる焼成室基部が通焔孔部から段差をもって下降する甕主体の窯については，新たな外部からの情報がもたらされた可能性が高く，その構造は渥美・湖西窯の甕主体の窯とも共通する。

なお，焼成技術とも関連するが，従来の燃焼室とされた部分の天井が存在しなかった可能性を提示した。実験考古学的研究の成果から，燃焼室に天井がなくても焼成は順調に行われ，「焚き冷まし」技法においては，燃焼室に天井があると却って作業が困難になるという結果を示したが，今後の他の調査において検証が行われるべきことを指摘した。

第３章「遺物・装飾論」では中世常滑窯の各種遺物と装飾に関する研究をまとめた。初めに中世の甕の古代からの不連続性を論じ，その不連続性の中に瓦成形技法が取り入れられるという特色を見出して甕出現期の様相としてまとめ，その瓦成形に伴う叩き締めの文様が中世では装飾的な性格を強めて新たな甕の創出がなされたことを論じた。2009年に報告された平泉遺跡群内の花立Ⅰ遺跡第28次調査の瓷器系窯跡については，その性格付けに困窮するものながら，明らかに常滑窯や渥美・湖西窯と密接な関係がある中世の窯であり，この窯の製品にも瓦の叩き文に近似する文様が施されているのである。

次に，中世常滑窯で12世紀代に多く生産された特徴的な三筋壺とよばれる器種については，経筒及び経筒外容器に認められる仏塔の要素が三筋文に反映したことを指摘し，それが院政期に流行した装飾として経塚以外の都市的な場においても受容されたと考えた。さらに，中

世常滑窯の甕・壺類に主として施される押印文に関しては，その出自と文様意匠の分類し，これまで装飾性と機能性の両面が指摘されてきた押印文であるが，本論においては装飾性により重要度が高かったとする見解を提示した。とりわけ12世紀代の帯状連続施文に関して，従来は成形工程に合わせて，接合部の密着を促進させるための機能に重点を置いていたが，押印文の内面に当具を用いない施文法から判断すると，帯状連続施文が三筋文とも関連する装飾である可能性も高い。

製品の機能について，とりわけ大型の甕の機能については，酒の醸造具としての役割があったと想定した。室町期の酒蔵跡と想定される平安京六条三坊五町遺跡のような甕の多数埋設遺構は，鎌倉や平泉の遺跡群では確認されていない。しかし，その鎌倉や平泉では常滑窯の甕が大量に消費されていることが判明している。建長四（1252）年に沽酒を禁じた際に調べた鎌倉中の民家にあった酒壺の数，37274個という圧倒的な数を合わせて考えた場合，それらは埋設されることなく人目に付く形で保管されていたという推定が成り立つ。また，平泉で確立されたとする白磁四耳壺や三筋文系壺とかわらけ，折敷，箸による，東国の宴会形式において，膨大な量の廃棄が認められるかわらけに注がれた酒が，甕で醸造されたものであることも容易に想定できる。今後の検証作業が求められるが，人目にふれるような形で酒を醸す甕が配置されていたとすれば，押印文の装飾性も一層重要な意味を持つことになる。

また，常滑窯製品の流通については，従来の製品の出土遺跡の分布からその地域の特性を把握するという方法の問題点を指摘し，遺跡の分布に加えて出土している器種と把握できる個体数，その編年的位置を総合したデータによる分析法を提起した。この方法によると遺跡数では関東地方と東海地方でさほどの違いが出ないが，出土遺物の数を見た場合，鎌倉遺跡群の出土数は，東海地方よりはるかに多いことが判明する。この都市的空間における大量消費という現象は平泉においても認められ，東北地方の総出土資料数より平泉遺跡群の数量の方が勝っている。こうした都市や居館，有力寺院などにおける大量消費の傾向から，中世陶器に与えられていた日常雑器，とりわけ農業生産の発展に寄与した生活具という，従来定説化した観のある性格付けを否定した。

時間の変化に伴う流通の状況からは，東海地方と関東地方は類似する傾向があり，13世紀の中頃から後半にかけてと，15世紀に常滑窯製品の消費が活発になるのであるが，東北地方と西日本では15世紀の盛期が認められない。西日本においては備前窯を中心に信楽窯や丹波窯などが盛んな生産を行なっており，常滑窯製品の代替が行われたことが想定できるものの，東北地方においては関西諸窯の製品は流通せず，それらに代わるものも存在しない。

常滑窯製品の流通に支障がある日本海側の地域や東北地方では，12世紀末から14世紀前半にかけて常滑窯の甕に似た製品を生産する窯業地が形成された。それは西日本の信楽窯や丹波窯も含めて常滑窯の技術が伝播した結果と見ることができるが，これらの窯も多くは14世紀前半のうちに操業を止め，信楽・丹波・越前が残ることになった。この変化は須恵器系中世陶器の動向とも連動しており，日本海側の珠洲窯が廃絶していく流れとも対応するように東播諸窯が衰退するのに対し，越前窯が盛期を迎え，西日本では瓷器系の窯業地が盛んになる傾向がある。ただし，備前窯においては，須恵器系から新たな焼成法を確立し擬似瓷器系とでもいうべき製品を創出する。また，東播諸窯で量産していた製品は片口鉢で，広く西日本に分布し，関東地方や東海地方で見られる常滑窯の片口鉢は西日本には，ごく少量しか運ばれていない。つまり，片口鉢は常滑産である必要がなく，常滑製品で求められていたのは，須恵器系の甕にはない堅牢に焼けた褐色の甕であったということになろう。その傾向は常滑窯の技術が移植された各地の窯業地においても，甕に関しては常滑製品を比較的忠実に写すことが行なわれているのに対し，片口鉢は各地域の特色を発揮する事例が多いことからも指摘できる。

全国的に流通する甕・壺・片口鉢の3器種に対し，生産地においては山茶碗・小碗・小皿が大量に生産されている。しかし，この山茶碗類は生産地周辺においてのみ消費されているのである。伊勢湾周辺の状況を見ると伊勢南部と三河東部の渥美・湖西型山茶碗，伊勢北部から尾張部の常滑・猿投・瀬戸窯産の尾張型山茶碗，美濃では東濃型山茶碗という主要流通域があるものの，それらは西三河における渥美・湖西型と尾張型山茶碗の混在する状況にみられるような中間地帯が存在する。さらに，少量ながら知多半島の遺跡で渥美窯産の山茶碗が検出され，13世紀後半には尾張型においても瀬戸窯産の山茶碗が分離可能であり，その瀬戸窯産山茶碗が知多半島中・北部の遺跡で常滑窯産と同量に近いほど出土しているなど，産地間の交流が認められる。

結章「中世常滑窯の歴史的役割」では中世常滑窯の果たした役割を渥美窯や猿投窯，瀬戸窯さらには珠洲窯などの主要な中世窯業地と比較しつつ考察を加えた。その視点は序章で提起した半島としての地理的条件が果たした役割を受け継いでもいる。12世紀初頭に知多半島と

渥美半島で始まり，やや遅れる形で12世紀後半に能登半島で見られる拠点的な窯業地の成立は，広域流通を視野に入れた半島開発の結果であり，その背景には平泉の存在が大きな役割を果たしていた。近年の文献史学や文化財の研究成果によれば平泉の砂金や馬，そして武器・武具の材料となる動物資源などが中央の権門に贈られ，平泉藤原氏と密接な関係が結ばれている。また，奄美群島で産出する貝を材料として中尊寺金色堂の螺鈿装飾が行なわれていることなども明らかになっており，藤原清衡の時代に列島全体を把握した開発が図られる土壌が存在したことをうかがわせる。さらに，陸奥南部から北関東の有力氏族が，藤原清衡と近密な関係を結んでいたことも明らかになりつつある。そうした背景の中で新たな半島開発が行なわれ，東国を中心に大量の新たな陶器群が供給され流通するようになり，その開発が半島であったことは物流における舟運の利用が重要な意味を担っていたと考えられる。

12世紀に盛んに造営された埋経系の経塚は13世紀になると急速に退潮し，鎌倉では永福寺の東丘陵に1基のみ確認されているに過ぎない。それは，金鶏山経塚や中尊寺境内に想定される経塚群をもつ平泉とは対照的である。この流れに沿うように，渥美窯や猿投窯は広域流通品の生産を止め，それに代わって古瀬戸製品が鎌倉へともたらされる。そして，大型製品に関しては常滑窯に集約され，猿投窯や渥美窯は山茶碗生産という近圏流通品のみの生産へと転換する。この転換は北条得宗体制の成立によって完成するものであろうが，その一方で平泉の終焉が転換の始まりを告げたものと理解している。

A Study of Christina Rossetti: As a Victorian Poetess

文学研究科英語圏文化専攻　　Shu-Hui LIN

The Aim of the Research

As I was attracted by the rhyme and rhythm of verses, I chose Christina Rossetti's "Sing Song" not only as the subject of my graduation paper but also for amusing my daughter who was at the time only three. That was what started me on studying Rossetti's poems. "Sing Song" is filled with simple expressions and amusing wordplay which lead into the gaily fantastical realm of children's literature. In the further course of my research of Rossetti's work, I encountered the interpretation based on feminist theory, especially the various possible readings of longer poems such as "Goblin Market", "The Prince's Progress" and "The Iniquity of the Fathers upon the Children". Many aspects of these better known poems have been discussed from contrasting points of view for many years now. I followed previous scholars in my reading of these mature pieces, but I also found the important elements to consider in Rossetti's earlier poems. Studying earlier works may lead us to probe into an author's learning process. This is certainly true of Rossetti's "Juvenilia", as her brother William called her earliest poems, which give a valuable insight into her early reading and writing habits, and thus into the deceptively simple ways in which she expresses her thoughts and sensations. In my overall thesis, I focus on feminist viewpoints on Rossetti's poetry and especially on comparisons with female figures in fairy tales.

It was not until the eighteenth century that women's rights started to be seriously considered, and when this happened, it was in particular connection with such issues of feminist movements, women's education, laws, women's welfare, women poets and writers, and so on. The social role of women was gradually gained more attention from the late eighteenth century on, and this change of attitude then grew into the issue of general concern in the middle of the nineteenth century.

Many "literary women" in the nineteenth and early twentieth centuries, most notably Elizabeth Barrett Browning, George Eliot, and Virginia Woolf, were sharply sensitive to the unfair treatment of women in the social system as they found it, and protested against the problems that they felt were most vital to contemporary readers.

Christina Rossetti is representative of her time. It was part of her intention to express views on her social surroundings by means of her talent in lyric poetry, religious verses and nursery rhymes for children. In view of this general aspect of her work, I will consider her attitudes not only focusing on the best known poems such as the "Sing Song" collection, "Goblin Market", "The Prince's Progress" and "The Iniquity of the Fathers upon the Children", but also paying due attention to the learning process already evident in her "Juvenilia".

As one literary genre I will concentrate on is fairy tales, I will regard them especially from the viewpoint of feminist criticism. Another clearly related genre is nursery rhymes, as represented by the fantastical "Sing-Song" collection. In her more ambitious poems "Goblin Market", "The Prince's Progress" and "The Iniquity of the Fathers upon the Children", Rossetti then calls on her readers to consider life in a fuller social context. The social issue of women's struggle is raised in "Goblin Market", in which more emphasis is put on the ethic of sisterhood than is ever the case in fairy tales. More generally still, in her major poems, Rossetti considers the transformations in women's social situations alongside the larger issue of women's independence in the Victorian period, while treating other more specialized themes, too. As already argued above, however, I also think it important to look into her earlier poems, the so-called "Juvenilia", as demonstrating the learning process she passed through from childhood to maturity.

Here is a more detailed preview of the contents of the chapters to follow.

Introduction

I introduce my purpose of this research. And I make a brief explanation of the biography of Christina Rossetti's family members.

Chapter One: "Juvenilia Poems"—'Sweet Love Shall Never Die'

I explore not only the literary heritage that Rossetti consciously imitated, but also something of her deeper and less conscious motivations. Although less importance is usually at-

tached to these early poems, I do not approve of this view, I think it is interesting to probe in the earliest poems for the earliest signs of Rossetti's later mature modes of expression.

Chapter Two: "Sing Song"—Maternal Love and the Image of an Ideal Family

Rossetti applies her imaginative capabilities to a wholehearted appeal to the minds of children. Words such as "ding a ding" and "ding a dong" are full of vocal fun and the child comes to enjoy the rhythmical play of repeating them aloud while altering the voice to strengthen or weaken the sound. But apart from an attraction for children, "Sing Song" also reveals an imaginary and poetical world that preoccupies the writer herself. Here, I will analyze the rhymes of amusing qualities and Rossetti's fantastic imagination.

Chapter Three: "Goblin Market": 'Joining Hands to Little Hands'

In this chapter I come to grips with "Goblin Market", which is generally acknowledged as the masterpiece of Rossetti's poetry. The poem excites a strong curiosity. Incantatory and amusing repetitions of words arrest readers' attention and allure readers into trying to discover what the mysterious context is about. Are these word games just attractive as displays of rhythmical incandescence, or is something else also implied? In all of her works Christina Rossetti devotes her rich imagination to the creation of a fantastic parallel world, but she displays this skill to its fullest in "Goblin Market".

Chapter Four: "The Prince's Progress"—The Meaning of 'Sleep'

Here, I focus on two types of Princesses, as found in "The Sleeping Beauty in the Wood" and "The Prince's Progress". By comparing the two, we can see the difference in view between a female writer's perspective and the more traditional male one. Additionally I consider the meaning of "sleep" in fairy tales in general, and attempt to extract a lesson for the new way of life which was becoming required of a Victorian woman.

Chapter Five: "The Iniquity of the Fathers upon the Children": From Femininity to Feminism

In this chapter, I read one of Rossetti's longer poems from two comparative viewpoints representing, on the one side, the ideals of physical and ideal family love among Victorians and, on the other, a feminist view of sisterhood. More particularly, I try to explore how a young girl, in the course of her growth process, learns to overcome the conflicts inherent in traditional social convention and to live independently. In other words, the aim here is to examine how a girl transforms from a dependent being into an independent woman.

Conclusion

In this thesis, I have tried to read Rossetti as a poetess and as a woman writer of children's literature in the Victorian age. And I have discussed her works from a point of view of feminist criticism in order to arrive at a view of women's roles in that society.